

3 白血病患者における二次感染に対する看護及び対策

南7階 発表者：笹田 まり子

三浦, 小川, 与儀, 平, 橘, 鳴海, 樋口, 高寿,
猫田, 細川, 津山, 鴻矢, 田山, 小椋, 永見,
中山, 堤, 鈴木

一般に“白血病”とは不治の病いとされ、多種多様な治療薬が、開発されつつある。それにより、寛解導入率も向上し、長期にわたり、寛解を維持できる様になってきた。しかし、抗白血病剤の骨髄抑制により、正常の白血球が減少し、種々の感染症をひきおこす患者が少なくないのは事実である。

当病棟においても、治療経過中に種々の感染をひきおこしている白血病患者は多く、中でも口腔感染症と、肛門部感染症が最も多い。

口腔内感染症としては、真菌（カンジダ・アスペルギルス）、細菌（緑のう菌、エンテロバクター）等の起緑菌による歯肉炎、アフタ、潰瘍等があり、イソジン、フエンギゾン等の含嗽水、ヒビテン菌ブランによる口腔内の清掃を試み、又口腔外科医の処置を受けているが、進行が早く、その疼痛、不快感のために、患者は苦痛な日々を送る事になってしまう。

又肛門感染症には、肛門周囲炎、肛門周囲膿瘍があり、疼痛、発赤、硬結等の症状出現時から、^{0.02~0.05%}ヒビテン坐浴、坐薬の挿入等の処置がとられているが、こちらも進行が早く、出血傾向の強い患者にとって、最も危険である切開が必要とされることもある。

白血病患者にとっては、できるだけ清潔な環境、できれば無菌室で治療を受ける事が最も望ましいのであるが、現実として一般病室で治療が行なわれているのであるから、周囲は感染となりうるものばかりなのである。それらの事を考えると私達は、もっと清潔という事を頭に入れ、事前の予防処置、対策を考えるべきではないかと反省させられる。

私達看護側が、もっと感染予防に対する、意識、認識を強くもって、患者指導が行われたなら、事前に患者からの情報も得られ、それほど重篤な感染症にまで及ぶ事も、防げるのではないかと思うのである。そこでこれら予防策について考察し、今後の看護手順の一段階にできればと思い、ここに発表する。

※昭和55年度から現在までの全入院患者数に対する白血病患者の割合

651人中 45人 7.9%

※感染症併発患者数

45人中 29人 64.4%

※口腔内感染症併発患者数

29人中 22人 75.8%

※肛門部感染症併発患者数

29人中 9人 31.0%

4 保清と褥創

西館一階 発表者：塚脇 恵子

堀木, 巻島,

私達の勤務している西館一階という病棟は、脳外科20床、外科16床と、脳外科患者の占める割合が多くなっています。

脳外科20床という中で、“慢性意識障害患者”が常に平均3~4名は入院しています。そのほかに、手術後に片麻痺あるいは両側完全麻痺が出現した患者、手術後意識レベルが回復せず意識レベルが10~30度(3・3・9度)、両便失禁状態で、自分でナースコールも押せない患者を含めると、脳外科患者の中でADLの自立が可能な患者は数えるには足りません。

このような理由で、私達は今回の研究発表に“慢性意識障害患者”そして“自分では何も出来ないで看護婦の手を必要としている患者”を取り上げ、主に“清拭と褥創”ということに視点を絞り看護研究を展開していくことにしました。

“清拭と褥創”というテーマにそって、慢性意識障害患者に及ぼす周囲の環境や内部環境に、再度深く目を向けて、看護の原点あるいは基礎に視点を置いて、私達の病棟で行なっている、①保清方法、②褥創予防と対策、③栄養管理の実際、④事故防止(患者の安全)と対策…、科学的なデータを基に、個々の患者により看護行為に対する相異点などを考察し、看護研究を行うものです。

【第二群】

1 「PTCドレナージ患者の術后管理」

— 症例を通して

2病棟 発表者：鎌田 和子

田島, 兼島, 戴, 高山, 原田, 黒木, 川上,
長岡, 荒木, 副島, 松崎, 小池

年々、悪性疾患の占める割合が高くなっている中で、肝外胆管が、胆石や腫瘍等により、機械的に閉塞されて